表1のとおりで地域，緯度，総種数，それから比の値を示している。図1はそれを地図上は示したもので，一目でわかるように比の値をA-Fの6段階に分けて記入してある。まだ世界中の各地でシダフロラが完成していない所が多いので抜けている地域も多いが，概観したところ比の値は北に大きく南に小さいということがいえる。両面体胞子をもつシダが四面体のものよりも後に発現したと考えられていることを考えると，シダ類はもしかすると南極大陸のような所から始まって北へ向けて分布し発達したのではないかと想像してみたくなるところである。一つ例外があり，北アメリカではEやFという最小の比の値が広く分布しそれが北緯40°以上に延びていることである。この原因は将来の研究に待たねばならないが，砂漠的気候の所が多くそこには四面体胞子のシダの属がよく発達し，その上種数が非常に少ないためにそうなったのかとも考えられる。

□中尾佐助：**現代文明ふたつの源流**. 朝日選書 110，228頁。1978年。著者がかねて主張している照葉樹林文化と，西欧文化の元となった硬葉樹林文化の比較論で，オリーブとムギ，イネと金魚，歌垣と盆栽，家と垣根，カーストと網目社会等々が，アジア，アフリカ，ヨーロッパにわたる見聞をもとに縦横に論じられ，東亜の照葉樹林を源とする独特の文化を強調しており，多くの示唆に富む意見が盛られている。

カシ類の散布様式について新らしい意見が出されているのが注目される。この類の鳥による散布は従来否定的であったが，著者はハトやキジのような中型鳥類によって，一旦，嗉嚢にとり込まれた堅果が，その鳥がタカやハヤブサのような肉食鳥によって捕殺されることにより，地表にもどされることを偶然の観察から推定している。これら中型の鳥類はその行動半径が大きいので，ドングリの散布距離も，これまで考えられていたものよりはるかに大きいだろうという考察はうなずけるものがある。また先史時代といえども，人類の森林破壊は，食料獲得のために盛んであっただろうから，照葉樹林が日本を完全におおっていたような状態は無かっただろうという。

もう一つ，植物名を扱う者にとって見のがせないのは，外国産植物につける和名の一般的な命名法を考え出して用いていることである。これは属の和名の前に示種名のよみをそのままつけたもので，イレックスガシとかチャイネンシスバラとかいう呼び名である。こういう呼び方は合理的であるが，誰かがやり出さないとなかなかふみ切れないもので，最初にそれに踏み切ったことに敬意を表したい。近ごろ外来植物に新和名をやたらにつけることがはやっているが，このシステムが一般化すればそういう流行はなくなるだろう。属の和名をうまく協定できさえすればすぐれた方式であると思う。 (金井弘夫)